野沢　正光

インタビュア
坂田・勅使河原・正林・上田・西尾

坂田
今日は大きく分けて三つのカテゴリーの質問をしたいと思っています。最初に卒制について、次に野沢さんの環境分野や野沢さん自身について、最後に野沢さんは僕たちみたいな若造とは違って長く建築に携わってきていると思いますので、時代についての話をお伺いできればと思っております。

野沢
聴いていただければなんでもお答えいたします（笑）

一同
（笑）

野沢
本来だったら懇親会の後にいろんな世間話ができたらよかったんだけどね。コロナが終わった後、閉塞的な状況が終わった後に。我が家に来てくれるといいね。坂田くんが言ったように君達と私の年齢には明らかに大きな差がある、差があるっていうのは直接の利害がないって事でもあると思うから、一回盛大にやりましょう。

坂田
ありがとうございます。是非お願いしたいです。
今日はよろしくお願いします。

卒業設計はあくまでも一つの通過点に過ぎない

野沢
卒業設計について話をしますかね。国大の場合、どのくらい指導を手取り足取りやっているのかわからないけども、基本的にはあまりやってないと思うんだ。その方がいいと思っていて、卒業設計はあんまり誘導的に指導されずに勝手にやった方がいいと思っている。そうは言いながらもこのコロナがどう影響するんだろうっていう心配はしました。結果は遜色ないと言う結果だったと思う。印象に残ったのは自分が育った環境とか、あるいは自分がよく知っている場所以外の選択をすることが今年は特に難しかったっていうことだったのかな。それによってその人の私的な、個人的なメッセージがきちんと置かれている計画が多かったという印象はありました。あまり稀有壮大な空中戦よりは、自分のよく知っている場所を選択した。それは少し顕著だったかなと思いますね。それはよかったなと思いました。それともう一つ、道というか経路みたいなものをテーマにしたのが多かった。郊外住宅地も多かったんだけど。それも拠点拠点を考えるみたいなことをした。その場合には道は主題ではないんだけど、でもA、B、C地点みたいなものがあって、そこを繋ぐ。計画しているのはその場所それぞれなんだけど、それをつなぐものを考えていたり、あるいは「道」そのものだったりするのが例年より多かった。見ようによっては土木だな、なんとか建築にしました、屋根かけました、けど、つくったのは「道」みたいなのが結構多かった。それもなかなか面白い、示唆に富んでるなと思いました。建築が解けることと建築では解けないことがあって、コミュニティとかコモンとか考えるとつないでる領域みたいなものを考えざるを得なくなる。単体の建築では答えは出にくいだろう、そう22歳の君達が思ってくれているのは僕も共感する。そういうことを考えてくれた作品は記憶に残ってます。うまくいったのとうまくいってないのと両方あるけど、そこはどうでもいい、トライアルなものはうまく行っていてもそうでなくても共感しました。壮大な社会的宿題をテーマにしてくれたわけではないけど、自分の育った場所、よく知っている場所をテーマにせざるを得なかった結果、地に足がついた。ローカルにきちんと考え、考えている中身はグローバルに展開することが可能なものを含んでいたっていう感じはしてます。よくやったと思っています。一人一人は卒業設計を提出して、ある程度の自らの評価を感じたり、失敗したと思ったりしてると思うのだけど、それも通過点だと思うから。そこは忘れちゃってもいいわけです。よくやったっていうことでいいんじゃないですかね。それ以上のものでも以下のものでもなくて、君達にとって大きな成果だと思います。

坂田
今回特に野沢さんが票を入れていただいた作品や興味を持った作品についてお聞きしたいです。特に西尾が庭をテーマでやっていて、野沢さんの自邸も庭ということで何か共感するものが特にあったんじゃないかと思いました。

野沢
なるほど。西尾くんのやつは駒込？

西尾
はい。

野沢
そうですね、僕自身のシンパシーもありました。さっきの言い方で言うとよく知っている場所を選んでくれてたんじゃないかな。そこにちょっとだけ手を入れることによって、もう一つの豊かさを持つ場所が現れる。あのプロジェクトが「庭」かどうかっていうのはそんなに思っていなくて、建築が街の

中に介入するときに一番効果的に、あるいはもっと言うと建築家だから考えられる町への手の入れ方として、「繋げていくこと」っていうのかな、確か斜面地で、坂であることを使いながら繋げていく。手法としての提案が時間を経た場所を選んだことに一種のアドバンテージがありましたよね。

西尾
切り通しの榊原さんの作品に票を入れていました。

野沢
あれはまさに「道」的なプロジェクトだね。建築単体でさまざまな問題の答えが導き出せるっていう非常に幸運な建築っていうのもあるけど、建築単体っていうのは無力の場合もあるさ。A さんのための建築を作ったところで、例えば住宅に限ればそんなに社会的にも大きな意味を持ったりしない場合もある、ある人の家を作って、その人の満足は作り上げることができても、それが社会的にどういう意味を持つかというと、そこにはつながりにくいところがあります。そこの地域なり社会なりが持っている問題を片付ける提案がそこにはない、その地域と離れている、技術的に建築の可能性を大きく変えていくとかがあればそれはそれですが、社会を少しでも変えていくことに、なんらかでつながることができれば、少しなりともsocial responsibility をはたし、僕らにとっての仕事上の満足になるだろうっていう感じがする。だから、（榊原さんの作品の）行き止まりの小さな人々の生業と向こう側の生業を道によってつなぐみたいなプロジェクトは、ささやかな社会的提案になっている気がします。こういう提案がいくつかあったよね。

建築の大きな宿題は都市

坂田
そうですね。特に自分たちの学年はなんか建築学部から都市科学部になったっていうことで、なんか建築よりももっと都市に興味があるような提案が結構多いとか言われたりしていて。

野沢
建築学科の大きな宿題は都市的なものだったんだろうね。東京大学に丹下さんが都市計画の学科を作ったときがあって、それより前までの建築家が描く都市像っていうのは絵画的でグラフィックに説明できるような都市を描いてたんだよね。そこから先、都市工を出た人が役人か学者になっちゃう、統計的な処理をすることによって都市の姿を分析する、絵で描く都市計画じゃなくて数字で描く都市計画みたいなものになっちゃったんじゃないかと思う。都市が素敵になっていかない時代がここ何十年か続いているような気がする、ささやかでもいいから建築単体じゃなくて建築を群で考える必要が出てきている。道を考えることとか、コモンズとかを考えることになるっていうのは不思議ではないし、なって欲しいとむしろ思う。

坂田
なるほど。いや結構最近の世代はなんかそういう風に建築をネットワークとして捉えて街をリサーチして、そういう方向から提案していくっていうのはいいと思っているということですよね?

野沢
そうだね。都市自身をどうやって捉えるかということもなかなか難しいよね。例えば大きな円形の建築をその都市の中にどんどん置いてみるみたいな提案（宮本）ががあったよね。あれは僕もびっくりしたね。あの北にあった基町団地は僕らが関与しているんだけど、ああいう大きな都市計画の中に大きな建築を置いてみるっていうこととも都市計画的な作業かもしれない。それから、横浜の郊外住宅地それも丘陵地の戸建住宅群を考えた人が結構いたけど、それをどうやって再生させるかとか、どうやってネットワークにして行くかみたいな話も都市計画的だったり都市再生的と言えますよね。まあ要はこれからの宿題として君たちが考えていること、僕が仕事をしながら思っていることは一種の修復に近いのかもしれない。今それをやることはすごく重要なことだし、それを社会側に共感してもらうこと、じゃあそうしてみようかと思ってもらうことをこれから君らが実務の中でやっていくことになるかもしれないなと思っています。

photo by yugi harada

坂田
僕野沢さんのフェイスブックの記事を見させてもらってるんですけど、都市について結構いろんな投稿するなという風に思っていて、例えばなんか緑とか残っていたら、これはいいこれは悪いとか、もしくはちょっとそこは環境分野のことなのかもしれないんですけど住宅のサッシについてこれは良くないとか。他の建築家の同じ世代の建築家の方よりも都市計画や都市再生的なことに興味を持っているように感じました。

野沢
建築っていうものがやれる仕事は僕らが仕事を始めた何十年か前の夢でいうと都市とは言わないかもしれないけどランドスケープだったんだろうね。僕は大高さんのところにちょっといて、大高さんとは辞めた後も長く付き合ったんだけど、彼は福島の出身で農村を考えたんだよ。農村を考えるってあんまり建築家はやらないのじゃないかな。あんまり家建ってないし。だけど彼は農村考えて農村の風景を考えたと思うんだ。都市計画っていうよりもランドスケープとか風景とかって言ってもいい。つまり風景が良くならないかなって思った人だと思うんだ。その頃の農村は今のようにスプロールしてアパートがいっぱいたっている風景じゃない、建築がほぼないというのは風景だろうから。そこにヨーロッパの農村にある教会のような尖塔がポンと建つ、そういう非常に絵画的なイメージを持って、それが社会的には農協っていうのが農村エリアの中心的な施設じゃないかって彼は思ったみたい。つまり絵描きのような気分とその社会的なその建築の役割に対する信頼みたいなものが当時は幸せにも並立可能だったんだろうね。だけど今となってみるとそのランドスケープっていうのは、僕から見るとですけど建築家のせいもあって混沌としているっていうか、散らかっているというか。これでいいんだと思う風景には到底見えないというのが僕の思いで、この混沌が良いんだっていう話も無いわけじゃないと思うけど、僕の場合は風景としての都市とか風景としての郊外とか風景としての田園とかがもう少し合意に基づく計画が支配している風景であって欲しいと思っているんだ。なかなかそこは難しい。計画というのは誰が計画するかということが大問題で、今となってはなかなか合意が作りにくい、戦後の大高さんの時代というのはそれをやる人がいない、みんな静かだし、他のことで忙しい、貧しい、前川國男とか大高正人とか東京大学出たエリート、からみんなのためにこれがいいだろうという計画が上から降りてくる、下からの意向によるものではないものでは残念ながらあったんだろうね。今の計画は、合意に基づいてみんなで作っていく計画になり得ないとおかしい。だったらそれを作り上げる努力をすべきだ、と思うんです。アプローチは違うんだろうと思うけれど、計画それ自体、もしくは計画するっていうことに合意して、それによってコミュニティやコモンズを作っていくということがこれからの建築の大事な仕事なんじゃないか、と思ってるんです。

上田
建築家像の変化みたいなことについて質問を書いたんですけど。（質問リストを見ながら）建築家像みたいなのものが、リノベーションだとかまちづくりとか公共空間といったようなローカルな分野における活動を通して、最近拡大していると思います。今の話を聞いていて、そのような建築家像の変化もおっしゃられた時代の話とか合意の話に関係するのかな、と思いました。

君たちにとって励みとなる建築家像

野沢
そうですね。ぼくはいま 70 代の半ばを過ぎてるっていう後期高齢者と言われるとこまで来たんだけど、まだ飽きずにこの仕事をやっているっていうのは、君たちにとって励みになるんじゃないかなと思う。この仕事は飽きない仕事なんだろうね。僕がこう言うと偉そうだけど。ごく普通の市民として、こんなことがあってもいいんじゃないかということを建築領域で考える、つまり何を社会に提供できるかということを考える上で君たち自身が市民としてどれだけが鍛えられているかということが多分すごく大事だと思うんだよね。僕は昔幕張ベイタウンの仕事をやったことがあって、幕張ベイタウンのハウジングは結構先駆的だとか凄いとか言われているものではあって、もう 15 年位前かな?要は今までの羊羹を並べたような団地じゃなく、街区型で中庭を取っていくみたいな都市的な住宅を作ったっていうことで褒められてるんだけど、あの時の相手にしていたデベロッパーたちと僕はほとんどもう口も聞きたくなくなっちゃってさ（笑）マーケティングでモノを作ると思っている人達が市場調査してこういうのが欲しがられているって作ったっていうことだよね。僕たちがやりたいと思っているのは、まだ無い市民社会の次の形みたいなものを僕たちが不遜にも専門領域にいる者として試みてみることっていうか、考えてみることっていうことであって、それは市場では経験したことないし見たことないから市場調査では全く現れないものなんだ、明日はこういう形になるのがいいんじゃないか、と思うもの、まだそれを経験したことない方に経験していただくという仕事。それはあらゆる領域の専門家がやるべきことだと思っている。だから市場調査によって作られるものっていうのは昨日あったもののむしかえしにしか過ぎないものだと思う。少しだけでも良いから今までにない明日の種みたいなものを見つけたい。それは場合によっては法に触れたりする可能性もある。法というのはあくまでも昨日を下敷きにしてできているから、なんとかその網を掻い潜ってちょっとでもいいから今まで考えたことのない物を経験していただく。専門家としてそのものに手応えがあるものにしなければならないわけでね。そういう仕事が建築家なのかなという気はしてるんですよ。

専門領域が交差することで社会の中の建築家の意味を見出す

野沢
だから君らは僕の仕事から何を見つけてくれているかわからないけど、愛農高校で３階建ての校舎を切って断熱改修とか色々熱的な処理をして、２階建てにしたことによって構造的に耐震改修を可能にしたというようなことは今の話に似ている。市場にとっては「そういうことってあるのですか」という感じでしたけど。だけどそれをやることによっていくつかの宿題、つまりスクラップアンドビルドの回避ができたし、今の物差しでいうＳＤＧｓ的な幾つかの成果をあげることもできた。それから快適な環境はある程度ローコストで獲得することができたということになった。同時に法的な手順であったり、例えば補助金をもらうところや、社会的ルールと付き合わなければならないところでは大変な事もありました。だけど僕たちのやる仕事は、やっぱりこういう方法もあるということを示すことで、場合によっては「脱法的な手段を使っても」って言っていいと思うんだけど、やれる時にやっておくということが僕たちの社会に対する最善のメッセージかなと思っています。この前の府中のソーラータウンっていうのもコモンを作ることをどう作るのかっていうのを、君たちの卒業設計レベルでは絵を描けばそれでいいと思うのだけど、それをどう社会制度的に定着させるかっていうことが僕ら建築家だけでは本当に答えが出なくて。さっきの３階を２階に減築して耐震補強にするのをサポートしてくれたのは構造設計者だし、府中の真ん中の緑のところもみんな土地を持ち出して負担をしながら、全体で成果を獲得するっていうということは不動産の専門家と話をしながら、制度的にこの法律を使ってこんな落としどころがあるんだということを彼に見つけてもらうことによってできているんだよね。１番最初の話に戻ると、さっきの幕張ベイタウンみたいに、マーケティングで作る時はそんなとこまでは誰も手を入れない。そこには幾つかのリスクがあるわけです。例えば、そんな条件の着いた住宅を買ってくれる人がいるだろうか。社会側のリテラシーみたいなものと距離を計りながらやっていくことになる。時にはプロジェクトそのものがうまく成立しない時もある。専門家というのはそれをやらないわけにいかない。それをやらないと新しい建築の姿、新しい建築の制度が現れてこないし、それを提案することがぼくらの仕事だと思う。面白い形の建築を作るとか、人々がビックリする様な建築を造ることも建築家の仕事だと思っています。造形作家としての建築家という立ち位置です。建築は社会やランドスケープに登場するわけだから、場合によっては今まで見たことないものであることっていうのもすごく重要なことだと思いますけど、一方で、その姿を獲得することだけでなく、プログラムをどう獲得していることが重要だと思う。それは建築家とさまざまな職能の連関、市民社会との繋がりを含みます。府中の場合はこの住宅を買ってくれる人まで巻き込んだ話で、提案する人として、アソシエーションの中に僕らはいる。僕らの役割として少し手を伸ばして、社会側のさまざまなことを考えている人間と、専門領域が交差しながら次の姿を考える。となると、小さな都市計画みたいなものや都市のコミュニティを修復していく職能としての我々は生き生きしていくと思っています。

坂田
他の建築家と比べて、野沢さんには社会的な存在としての建築家像というのを強く感じました。

野沢
渋谷とか見てるとなんだこれと思ってしまうんだよね。それから郊外のパワービルダー。僕の家の隣もそうなんだけど、パワービルダーが穏やかな庭がある一軒家だったところに３階建を４個くらい建てて、結局駐車場しかない風景になっちゃったりしているのを見てると、この仕事の無力さを感じたりするわけだよ。やっぱり僕らが、風景に対して責任を持つことができないでいることによるんじゃないかと思ったりもする。大高さんたち時代のエリートたちが計画してそれが街になっていった時代と現在は違うことが重々わかっているのだけど、ちょっと今は建築家はサボりすぎかなという気はしてます。一番大事で、一番充実することから逃げているという気はしないわけではない。繰り返すと、建築家が１つの建築作品に対

して個性を発揮することはつまらんと言っているわけではない。もう一つ大きな役割が存在しているんじゃないか。そうじゃないと、その領域は誰がやるのか、それはデベロッパーだけでいいのか（笑）僕らは今この風景の中に居る、前からこの風景の中にいる気がするけど、この風景は実はついこの間作られた風景ということがある。そうだとしたら２０年後の風景をどう作るかとか３０年後の風景をどうつくるかというのは僕たちが考えなければいけない。

善意が垣間見える土木からわかること

野沢
勅使河原くんがやったプロジェクトに関していうと、ああいうの僕大好きなんだよ、土木的なスケールのもの。建築学会より土木学会の方が好きというところがあるんだよね。土木学会が 80 周年の時に、人間は何を作ってきたかというのを並べた、登呂遺跡から近代までの土木の分野から見た人間の作為みたいなものをリストアップした本があるんだけど、それをハンドブックみたいに持って旅行にいく。土木遺産みたいなものを見るのが好きで、橋とかトンネルとか堤防だったり、治水事業だったり。土木って悪意がないと思うんだよね。A 地点から B 地点まで渡りたい時に、そこに川があるから橋をかけるというのは悪意がないよね。そこでの工夫があるよね。土手なんかも河川が氾濫するといろんなことが起きるから土手を作る。そのこと自身に悪意はないよね。建築というのは場合によっては悪意がある場合もあるのじゃないか。あざとさがあるというか。金儲けのためとかさ。やっぱり土木を見るというのはすごくいいことだと思いますよ。だから勅使河原くんのやつは堤防のいじり方に不満があったんだよね。堤防ってもっと悪意のないものだぜみたいな。（笑）それはすごく難しい。吉村順三事務所で僕の親しかった奥村昭雄っていう芸大の先生だった男が、吉村事務所時代にダムの上屋っていうのかな、ダムの上端部だけの設計を依頼されて、吉村事務所でやった仕事があるんだよ。ダムという巨大さっていうか、僕に言わせればいわゆる善意の中に建築的なスケールの作為を入れていく、それはそれでポンプ室とか幾つか役目があったんだけど、例えば手すりとかね。でもその仕事の難しさと結果のふがいなさみたいなことを彼が言っていた記憶があるんですよ。やっぱり相手が相手だけに相当難しい。そのことを思い出しながら「そんなにいじるの?」という感じがしたのは思い出していました。ここで今おだててもしょうがないしフォローを入れているつもりはないんだけど、土手に興味を持つという事については僕と同じ。土木学会の 80 年記念の『人は何を築いてきたか』とかいうタイトルの本には日本各地のすごくきれいな土木遺産が歴史の順番に沢山並んでいるんだけど、ぜひ見てくれたらいいと思うよ。同じように人工物だもんね。凄く涙が出るほどの善意が垣間見れたりする訳です。急峻な、何度も氾濫を繰り返す河川を穏やかに抑えたり、それも石組みだけで抑えて見事な風景を復元させている事例を見ると、「こいつ偉いなー」とか「この親父偉いなー」って思うわけです。建築家の作品として (の手柄）でも良いんだけど、僕は建築にも同じような偉さというか手柄を期待するんだよね。人が社会と関わるとどのような物であっても、社会制度であっても何であってもそこが肝だと思うんだよ。「社会からレスポンスが返ってきたときになんて嬉しいんだろういうか。」「なんてこの仕事って、社会とつながる事ってなんて楽しいんだ」と思うことが、すべての社会と個人の関係はそれに依るしかないと思います。　何度も言うけどウルバニズムは重要だよ。君たちの卒業設計ってほとんどの計画がウルバニズムに繋がるものだと思いますけどね。

「人は何を築いてきたか」 土木学会編　山海堂
（引用）https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product_id=294927735

坂田
自分の感覚ですが、俺たちの学年は藤原さんの精神に影響を受けたのかもしれないです。

photo by yugi harada

野沢
そうかもね。藤原さんが(野沢さんが)76 歳になってもまだ横国にいてくれって言ってくれてるのかもしれない。国大の３年生の所に毎年行って前期だけくらいならなんだかんだと応答してっていうのは、僕にとってもすごくいいローテーションというか時間の使い方になっているので、僕も君たちと色々やりとりすることですごい自分も助かっているんですよ。僕の方も助かっているという意味で相互的な関係ですから。

過去からの学び・経験で自分の時間軸を引き延ばす

野沢
短い時間で風景や物理的な社会はどんどん変わっているけれど、そんなに長く僕たちは歴史を記憶していないし、君たちは二十数年しか生きていないわけだから、意図的にランスケープを見ることを始めて数年しか経っていないわけ。だから 18 歳の時に見た風景が固定的な物に見えてしまうとしたらそれは相当ヤバいです。
そういう意味では学ぶって言うのはすごい大事。学ぶということは自分の経験の中の時間を引き延ばせるものだから。

　時間を説得力のある物として読み直すのはやったほうがいいことだよ。批評性はそれによって自信をもったものとして現れると思う。　数年前カメラマンの大橋さんの日本中の茅葺き屋根の写真集が出版された。彼が撮ったのは、東京オリンピックの少し前くらいに、彼がカメラマンとしてはプロじゃなかった時に撮って歩いたっていう写真集だったと思うんだけど。「僕のガキの頃の風景ってこういう物だったのか」っていうくらい、僕自身は覚えていないってことを感じた訳だ。そうやって学ぶことによって、他者から教えてもらうことによって、「江戸時代のような風景がついこないだまであったんだ」ということを確認できたりする。なんでこんな短い時間でこんなに風景が変わったんだろうということを考えざるを得ない、（その写真一枚が）一つの証拠になる。考えることに迫る物証が現れる。面白さってのはそこにもあるんで、『住宅特集』をみてると、昨日と今日の風景しか無い。やっぱり 30 年前の建築を観ることによって、30 年前の風景っていうか 30 年前に考えたものが自分の中に入って来て、今見えている今の断面に対する批評性っていうのが現れる可能性があるでしょ。だから教養っていうのは、言葉としては気持ち悪いけど楽しみとしてもすごく重要で、考えることの厚みが、知ることが多い分だけ増える。ネガティブな批評性ではなくてポジティブな批評性が増えていく。たくさん知ることってすごく重要なんだ。僕自身もそれは楽しみとして未だにやっている。知的な興味っていうのはどのレベルであっても面白い。ぜひ、たくさんの建築を観る、過去の計画を知るとか、できたらグループで勉強会をやるのもいい。付き合ってくれる先輩は沢山いると思うから（笑）。僕は実は「住宅遺産トラスト」のメンバーなんだけど、解体されてなくなってしまう建築がこの活動によって残っているということが起きている。この話は５月号の『住宅特集』に僕の書いた原稿が載るから、見てもらえるといい。建築を楽しむことと建築を作ることはセットなんだね。いい建築を見たこともないのにいい建築を作るなんて無理だよ。音楽でいうと、音楽聴いてるから作曲家になれる。建築も同じで、たくさんの建築を知っている、見ている、もしくはそれについて考えていることがあるっていうことの上で、建築を作るということにしかならないと思う。建築家が育っていくときに、あんまり幸福なことではないようなことの気がするのは、建築家のスクールがある。菊竹さんのところを出た人が、A さんとか B さんが、菊竹スクールの建築家として有名な建築家になっていったとして、その A さん B さんのスタッフだった人が、C さん D さんが建築家になっていくみたいな世界って、他の建築を見ないことだと思える。一人で孤高の建築家としていると、よく考えられた住宅を見ることができるかというと、ほぼ見ることができない。見せてくれっていっても見せてくれないよね?菊竹さんの事務所に勤めていたら当然ながら菊竹さんが作る建物を見ることができる。担当者であれば、当然それを見て、それの作り方を知る、そこにスクールが現れる。見ることができた集団をスクールっていう。建築っていうものの不自由さ、建築を知ることの不自由がそこにある。そしてそれは菊竹さんの建築を知ったということだからある意味偏ってる。答えはない、しかし建築を作る人になっていく過程で、過去の建築を知ること、体験しているってことは大事なことだとしたら、このことは重要だよね。鑑賞することとと作るってことは不可分ってこと。料理人なら中華も食って、日本料理も食って、フランス料理も食って、が可能だけど、建築を知るときにそれが可能かってことだよ。公共建築とかはある程度体験が可能だろうけど、住宅になると難しいよね。映画監督になろうと思った時には、黒澤明だろうがなんだろうがフィルムライブラリーで彼らが作ったものは見ることができる。シナリオは調べることはできる。実物を跳梁することはできますよ。スクール抜きに、小津安二郎のルートだから小津さんの映画しか知らないってことはない。建築の場合っていうのはそうでない気がする。この仕事の難しさかな、と思っていて。この話は答えがない。だが、誰々先生のところで下働きするのでいいのかっていうところが頭の中で引っかかっているだけのことなんです。それとは全く別に建築の社会性、都市を考えることは開かれている。都市を考えることを建築の軸にすると、どんなスクールでどんな風に学んだか、どんな癖を付けたかっていうことと関係なく、自分の建築、自分の任務、自分の社会に対してのサービスは、組み立てられるのではないか?自分自身は開けるのではないか?芸大出た建築家として、僕はスクールの中にそれほど属していない人っていう風にされているらしい。

坂田
野沢さんの事務所にインターンに行ったときに、吉村順三先生の図面を沢山見ましたし、野沢さんからよく芸大時代の話を聴いていたので、家に行った話も聞きましたが。

野沢
そりゃありますよ。そりゃその濃密なスクールの中にいたんですから。それは拭えないっていうか拭う必要のないかもしれないし、拭えないものですよね。ある時期ある場所で学んだっていうことはそういうものですよ。あなたたちにとってもそうだと思います。だからといってそこが安住の地ではない。お茶の流派ではないのだから。自分のやることを自ら組み立てていくことは、難しいけどね、別に無理して離脱することを考えるんじゃなくて、自分なりの思考に合わせて自然に離脱する。自分なりに行きたい方向に自分自身を持っていくっていうこと。楽しみにしていますからね、君たちの 20 年後を。

坂田
ありがとうございました。まだ話していない西尾とか正林とかから質問があれば。

ソーラータウン府中

建築家の職能

正林
最近の作品でソーラータウン府中っていうのがありますよね。半年くらい前の good design 賞で自分は知ったんですけど。今まで野沢さんは建築と自然環境の関係を捉えることが多い中で、町とか都市と自然環境の関係をこの作品で挑戦しているように僕には見えて。今後都市において自然環境をどうやって捉えていく、組み込んでいくのかっていうのを考えているのかっていうのを知りたいなって思いました。

野沢
一つの住宅っていうふうに考えると、住宅は自然環境に寄り添って存在する以外にない。住宅が閉じたものとしてしても、外部の気候なり、外部の環境と当然ながら応答しちゃう。外部が零下二十度のモスクワと摂氏二十度の東京の春とではどうしたって建築の内部に与える影響は違う。建築っていうのは外部に依存してしか存在しない、エアコンができてから建築がエアコンさえあれば外部と切断できるって感じになっちゃってる。閉じておいてエアコンつけると内部の気候は自在にコントロールできると。考えてみると外部にたいして排熱という名の排出物を作り出している、つまり中

ソーラータウン府中の中の路地空間

を冷やそうとするとエアコンの機械は表に向かって熱を放出しているわけだ。少し前まで、例えば、吉村順三の時代までは内部と外部の調整をどうやってしていたかというと、基本的にどうやったら南から北にどう風は抜けるかとか、小さな窓をつけて気候を作り出すかとかが主題だった。エアコンが作られる前までの建築の作られ方は応答的だったと思うんだよ。外部と内部は。エアコンができた途端にどんな箱でも何とかなるみたいな感じになっちゃったんだ。その前と後って、建築のやれることってすごく変わっちゃって、前は建築がやれること、建築がシェルターとしてやれることっていうのは、窓を閉めるとか開けるとか建具を工夫するとか、網戸にするとか、場合によっては蔀戸にするとか、様々な工夫が建築を考えることの必然だったのが、そうでなくなってしまった。その結果外部はすごく悪くなってる。エアコンの屋外機が並んでるのをサーモグラフィーでみると真っ赤だ。つまり、人間が作った都市というか地域社会というかすごくセルフィッシュなものになっている。外部がほぼ無法状態になるっていう感じかな。そう考えると、何らかの手段で次の自然環境と建築、つまり人工環境との関係を考えざるを得ないのが宿題だなって思う。そのときにどうやるのかわからないけど、外部を豊かにすることによってエアコンを動かなくするっていうゲリラ的な作戦を考えるようにしたのがソーラータウン府中。エアコンは実際にほぼ動いていない。外部に快適な気温が存在すると、窓開ければ済むわけだ。外部がアスファルトで舗装されていたり、外部にエアコンの屋外機が集まったりすると、気温は 50 度になったりする。そうすると誰でも窓閉める、そうするとエアコンつける。僕らはそういうジレンマの状況にいるわけだ。ソーラータウン府中は真ん中に緑をおいてそこから吹いてくる風は 50 度になんか当然いかなくて、周辺の外気温以下だ。外気温がそういうことになれば窓を開ける、そうするとエアコンつけない。っていうことがささやかにできている。職能としての、任務として、「こういう方法がございますが、皆さんにとって土地の一部を共有地として出してそこを緑化するので、幾分ご負担はございますが、ご負担なりに皆さんがのんびりできる、バーベキューができる場所が現れますが、いかがでございましょう?」みたいなことで、あんなことになってるわけです。そのことを思いついて、試みて皆さんにを食べたことのないものを食べる覚悟をしていただくことまでが、僕は職能だと思っているんだよ。で、一個の住宅を作ることも、さっきの話で言うと、建築家として頼まれたらやりますが、やれることなら、何らかの今までにないけどあっておかしくない、あるいはできてみたらこれいいじゃないって誰かがそこに居住する人たちが言ってくれるようなものを、なんて思いついたり、それを制度的にも崩れないものとして社会化するって言うことは結構充実した感じがある。

これから 60 年以上もある人生を通し、社会について考え続ける

坂田
その歳ですごいですよ。今失礼なことを言ったかもしれないですけど。

野沢
だって君たちは僕をそういうお年でと思うかもしれないけど、僕の人生モデルとしては内田祥哉さん、東大の名誉教授が、僕自身も親しくしてもらってるけど、彼は 96 くらいじゃないかな?この前僕は飯能の木造の商工会議所を作って、内田先生に見てもらおうかと思ったんだけど、コロナで、呼べなくて。構造をやった稲山正弘っていう内田先生の門下の人と、二人でやったので、「内田先生に見てもらいたいけど無理なので」と、写真をアルバムにしたのをお送りしたんだ。この構造はこういう理由だねとか言って細かく彼なりの解析と言うか、こういう展開がありうるのかもしれないと言う手紙が来ちゃった。そういうもんですよ。君たちも飽きずに下手すりゃ 96 までこの仕事やるわけですよ。後 70 年あるんだよ（笑）内田先生のことを考えたら後 70 年あるんだよ。僕のことを考えたら後何年だ?後 50 年くらいある。（笑）大丈夫だよ。僕にとって 20 歳上の先達はいまだに現役でいますからね。（追記　残念ながら、内田先生はこのインタビューの後、2021 年 5 月 3 日に亡くなられました。）

坂田
夢のような職業ですね。

野沢
ちょっと話がズレてるね。ソーラータウン府中からね。要は、自然環境についてとかさ、なるべくラジカルに考えるべきだよ。もう原発なんかやめてくれとか、忖度をしないメッセージを、自分の中で貯めとくべきだよ。アイデアとか、社会はこうあるべきだとか、自分の中の社会的メッセージをね。ギャアギャアいう必要はないと思うけど、自分ん中では鍛えておくべきだよ。そうしないと道具みたいになっちゃうから。道具みたいになっちゃうと、どっかの官僚みたいに言わされているまま、申し訳ございませんみたいなことを言わなくちゃいけないみたいになっちゃう。建築の業務なんてデベロッパーと付き合ってこういうものを作ってくれんなんて言われて、何でこんなつまんないもの作らなくちゃいけないんだよみたいなことになっちゃうよ。金もでかいし、経済社会とのつながりもでかい。そういう領域にいたなら領域にいたなりにやることっていうのはあると思っていい。業務全体を否定する必要はないと思う。作家のように彫刻家のように建築を作ってもいけないと思わない。だけどそれが、社会的な個人は多分作家のようには住宅は作れないだろうと思う。いや、その人間がよく考える人であったり、自分の中に社会的なメッセージを何かしら、考えてることをやめていない人であれば、その人が陶芸家であっても彫刻家であっても建築家であっても作られたものは面白い物になると思う。作ることだけに興味がある人であったならば限界は見えてくると思う。

坂田
色々な建築家がいると思うんですけど、結局、社会的であること、他の人と関わり続けるっていうことが重要なんですかね?

野沢
そうだね。本当にどうだったのかわからないけど、ブルネレスキとか、ああいう時代の建築家て、一人で全部作れたのかもしれないね。全部を考えられたのかもしれない。あの時代の建築は一人で考えられたのかもしれないよね。今の建築ってさっき言ったように環境の問題とか、構造の問題とか、あるいは制度とか法律の問題とか、色々な専門家の知識とか、例えば火災だとか、いくらでもあります。木造技術とか。そういうものを、それが、いくつもが絡み合ったものの総体を用意せざるを得ない。そのときに、誰とこのプロジェクトを作り上げるかっていうことがある。全部自分でやるっていうことは、非常に幼稚な建築ができる可能性がありますよね。だから、自分自身が自分自身の領域をどこまでやって誰にどの部分についてのサポートをお願いするか、誰と共同設計するかっていうのはかなり重要な前提になる。そのときに、向こう側に有能な人が現れなかったらプロジェクトそのものも陳腐な物になりますよね。そうでしょう?あなたたちが有能でない限り有能な人は近づいてきません。工務店のことで例えると、有能な工務店には有能な大工がいて、有能な大工は有能な左官屋がいます。有能な大工でないところには有能でない左官屋しかいません。それは、大工があの左官屋じゃ嫌だっていうからです。それはチームっていうのはそういう物です。君たちが鍛えられていることっていうのはすごく大事で、それによって、思いつかないような、プロジェクトを成立させるフォーメーションが現れる。どうしてもそうなる。そういう一員に君たちになってほしい。そういうことが君たちを鍛えるっていうか、任務であるっていうか。その方が楽しい、絶対。それは極端にいうと、君らが自立してるっていうことにかかっていると思う。価値を誰かに依拠していない、価値を君たちは自身で組み立ててる。若い時はフラフラしてもいい、何してもいい、なんていうのかな、いつの間にか、考える人になっている。基本的には激励しているだけなんですよ。（笑）本当に今年はこんなことになるとは思わなかったけど。そんな一年だったよね。これはこれでしょうがない、それが大きな障害になってるなんて感じはない、特に卒業設計見てそう思った。君たちの来年の、この春からの活動を時々報告してください。

坂田
最後に、まだ西尾がまだ質問していないので、いいですか?

西尾
いろいろ激励の言葉をいただいたなあと思って。それだけで十分なんですけど。自分の建築をやっている上でのモチベーションとしても、原風景が小さいときにあって、それがなんか今では僕もともと福井県出身なんですけど、平野がひろがっていて、田んぼがいっぱいあって。その田んぼがなくなって建売の住宅が建つという状況になっていて、どうにかしたいなあと思いながら、どうすればいいんだろうと悶々としているんです。

野沢
僕もその気持ちはよくわかって。10 年前の 3.11 が起きたときに、色々なことを考えちゃったんだけど、3.11 の津波を予測していた東北大学の先生がエッセイを読んでさ。1000 年くらい前に、貞観地震っていうのがあって、大きな津波があった。その津波の跡と押し寄せた砂が内陸に残ってるんだね。それと今回の津波の到達点がほぼ一緒であることが実証されたというのがあった。短いスパンでも風景の変化っていうのに対して僕らは、確認しようと思えば確認できるのにそれをしてないっていうか、この風景が今の風景だと思うだけで昨日の風景を忘れているっていうことがある。僕らが何を定点にするか、根拠にするかっていうことは、知ることによってしか確認できないし、自分の中でそれを確信することはできない。どうしたらいいのか僕もよくわからないけど、今の田んぼの話は、大高さんが田園の風景を懐かしいランドスケープとしてずっと想っていた。建築家が田舎を思うこと自体があの時代にはほぼなかった、都市しか想わなかった。けど、大高さんは想っていた。先のことははっきりわかりませんけど、君たちが仕事をしていくこれからの 40 年 50 年は、たぶん人口問題研究所とかの予測で、2070 年が 6000 万人くらいっていう予測だよね。1 億 2000 万人くらいいたのに 6000 万人くらいになるってことは、過去に戻ると、少なくとも戦争の前くらいまでは戻るんじゃないかな。その頃の一人当たりの社会的な活動の規模っていうのは条件が違うからわからないけど。住宅の必要数の縮減は当然あるだろう。作ることよりも整えることとか、ひとりひとりの暮らしが馬場未織さんが実践しているように 2 拠点居住のようなことだと住宅の数は変わらないかもしれないけどね。「田園はどんなランドスケープになっていくんだろうか?戻るんだろうか?それとも次の新しい形になっていくんだろうか?」「住宅の様々な理由によって 30 年経つと壊されるものであったりするんだけど、ちょっと前は住宅はどんな維持のされ方をしたんだろうか?」「今後どういう風になるべきなんだろうか?」とか、建築家というより素人として、近傍にいる素人としては考える。制度とかを僕らが直接考えるっていうとどのくらい影響力を持つかは別だけど、考えることによって、提案をすることによって、何らかの実を得るっていうことは可能であると考えていきたいよね。僕がささやかにやっていることはそういうことかもしれないなって今言われながら思いましたね。どう考えても建築って社会的なものだから、陶芸家のお茶碗とはちょっと違うんだ。だから、物を作ったから満足っていうのとはちょっと違う。どう役に立ったかとか、どう社会に大して提案ができたかっていうのはどうしてもくっついてきてしまう。それをやっていないと、やっていない建築だねっていう風に見えてしまう、って僕は思っちゃうんだよ。こんなところで終わりますか?（笑）

坂田
野沢さんの人となりが、職業も話も通じてすごい聞けて、素敵なインタビューでした。（笑）

野沢
今日の一番の話はあと君たちは 50 年以上仕事するっていうことだよね（笑）

上田
それは結構大きいよね、言われてみれば笑

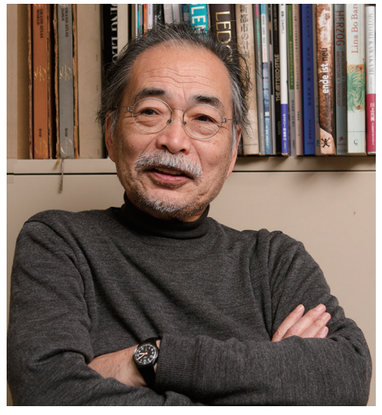
坂田
なんか就活とか、そこがゴールっていうか、どこに入るとか、どんな師匠に担当させてもらうかとかそこを見がちだと思うんですけど、それ以降が長いな、なとみんな思ったと思います。（笑）

上田
少なくとも 50 年（笑）

坂田
新しい視点だったね。（笑）

野沢
まあまた会いましょう。（笑）

学生
ありがとうございました!ぜひよろしくお願いします。



野沢正光

1944 年　東京都生まれ
1969 年　東京藝術大学美術学部建築科卒業
1970 年　大高建築設計事務所入所
1974 年　野沢正光建築工房設立
現在　　横浜国立大学理工学部建築都市・環境系学科非常勤講師、今までに武蔵野美術大学客員教授、法政大学大学院デザイン工学研究科、東京藝術大学、東京大学、日本大学、京都大学非常勤講師、他多数